



われらの森山校

志布志市立森山小学校だより NO.10 令和8年2月20日発行
学校ホームページ <https://424.ciao.jp/moriyama-els/>



サードブックの贈呈（2月9日）

みんなみんなにあいこう！

校長 古石美紀

3学期の始業式で、子どもたちに「1年間のまとめの時期であり、来年度の準備の時期であるこの大切な3学期に、二つ守ってほしいことがある」と話しました。一つ目は「最後までやり抜くこと」。勉強や運動、目標として掲げたことを途中であきらめずに最後までやりきってほしい。二つ目は、「感謝の気持ちをもつこと」。ありがとうという気持ちを伝え合うことで、みんなが気持ちよく過ごせる森山小になってほしいという思いからです。早いもので、3学期も折り返しを過ぎました。残り少ない日々、感謝の気持ち「ありがとう」を素直に伝えられる素敵な日々を過ごしてほしいと思います。

日本には、古くから「八百万の神（やおよろずのかみ）」という考え方があります。自然すべてのものに命や力が宿り、どんな小さなものにも感謝して大切にする。そのような「万物への敬いの心」は、今の私たちの暮らしにも息づいています。

子どもたちが日々口にする「ありがとう」という言葉は、まさにその文化の根にあるものです。誰かに優しくしてもらったときだけでなく、当たり前と感じてしまいがちな食べ物、環境、人の支えに目を向け、感謝の気持ちを言葉にできることは、心を豊かに育てていく大切な力であると思います。

「ありがとう」という言葉には、不思議な力があります。誰かに伝えたと相手が笑顔になり、その姿を見た自分自身も温かい気持ちになります。感謝を言葉にすることで、心が穏やかになり、人とのつながりがやわらかく、しなやかに深まっていきます。

そして、この言葉は“感じ取る力”と“伝える力”の両方を育てます。

学校だけでなく、日々の生活の中で、子どもたちが「おいしいご飯を作ってくれた」「話を聴いてくれた」「一緒に遊んでくれた」そんな小さな優しさに気づき、「ありがとう」を自分の言葉で伝えられること——、それは、人格の根っこの部分を育てる大切な経験です。日本の文化が大切にしてきた“万物への感謝”は、子どもたちの「ありがとう」の一言にも息づいています。

学校と家庭とが支え合いながら、子どもたちが周りの人や自然に目を向け、素直に「ありがとう」を伝えられる心を育てていければと願っています。

さて、学校HPでもお知らせしましたが、1月15日から29日にかけて、森山小の子どもたちがMBCラジオ「たんぼぼ倶楽部」という番組の「みんなみんなにありがとう」のコーナーに出演しました。

子どもたちが綴ったのは、家族（お父さん・お母さん・おじいさん・おばあさん）、交流学习をした鹿屋農高のお兄さん・お姉さん、いつも見守ってくれる片野さんなど、それぞれの「感謝を伝えたい相手」に向けた「ありがとう」の気持ち。一人一人心を込めて作文を書き、丁寧に朗読して、ラジオを通して思いを伝えました。

ラジオでは、感謝された相手の方々が、電話にて生出演し、作文の感想などを語ってくれました。MCの宮原恵津子さん・美坂理恵さんとのほのぼのとしたやりとりは、聞いている私たちを笑顔にしてくれました。

放送期間の2週間は、給食時間に「みんなみんなにありがとう」を校内放送で流して聞きました。様々な都合で全員出演とはなりませんでした。友達の「ありがとう」にみんなで拍手を送ることができて本当によかったです。貴重な機会をいただけたことに感謝です。ご出演いただいた皆様、ありがとうございました。